

日本音楽学会 2006 年度支部横断企画  
日本・韓国・諸民族の音楽文化の比較  
～オカリナを通して～

◆報告記

中部支部 加藤いつみ

この報告は、2006 年度支部横断企画の公募に採用された企画で、2007 年 3 月 24 日（土）広小路ヤマハホールで“日本・韓国・諸民族の音楽文化の比較”というタイトルで実施したものである。その内容は、Part 1.シンポジウム、Part 2.コンサートである。

オカリナ (Ocarina) は、イタリアのブードリオ (Budrio) に住むレンガ職人、ジュゼペ・ドナーティ (Giuseppe Donati 1836～1925) によって製作され、1853 年 “Ocarina” と名づけられた土笛である。Ocarina の Oca はイタリア語で鷺鳥という意味をもつことばであり、その由来は楽器の姿にあるという。(当時の売り出された笛は、現在のオカリナとは異なり、ずんぐりした丸い型をしていた)。周知のごとく、この楽器は日本では宗次郎(1954～)の登場により、一躍脚光を浴びるようになった。特に音色の優しさから中高年者に好まれ、手軽にアンサンブルされたり、ハイキングに持っていかれたり、ディサービスや介護センターなどで吹かれたりしている。筆者の 2000 年の調査によれば、北海道から沖縄に至るまで 500 以上（楽器店の教室は除く）のオカリナグループが存在し、そこには共通した音楽文化があることがわかってきた。日本の実態を知るにつれて、日本以外のオカリナ音楽文化をもつ国の学習者の実態、その発展についても大変興味を持った。他の国においては、どのように発展し、浸透していったのであろうか。この課題を日本・韓国・諸外国のサイドから述べ、比較することにより、オカリナの国民生活に与える影響が明らかになるのではなかろうか。これが今回の課題であった。

**Part 1. シンポジウム**は、中部の支部長、高橋隆二氏の司会で、3 人のパネリスト、加藤いつみ（日本）、Park Bong Gyu（韓国）、大沢聡（諸外国）が自身のオカリナを始めた動機、これまで行ってきた活動、その中から見えてきた音楽学習の実態、そしてオカリナが自国の音楽文化に貢献している現状について述べ、日・韓・諸外国におけるオカリナの普及・発展の実態について比較を試みた。

最初の発表者である加藤は、日本の学習者の特徴として①中高年者が多く、生涯学習として取り組んでいるという実態、②圧倒的に女性の学習者が多く、音色に魅了されて学習を始めた人が多いこと、③オカリナの発展におけるパイオニアとして指導法と教材の開発に尽力したこと、等の報告をした。韓国のオカリナ奏者、Park Bong Gyuからは、①韓国のオカリナブームの発端は宗次郎の訪韓によるものであること、②若者の間でメディアを通して浸透していったこと、③現在学校教育に取り入れられていること、そして生涯学習として中高年者の間にも浸透しつつあること、④「韓国オカリナ音楽協会」の設立者としてその礎を築いてきたこと、等の報告があった。オカリナ奏者として世界に羽ばたいている大沢聡からは、①子どもの頃の音楽的環境、②3連オカリナ「イカロス」との出会い、③人の縁を大事にして、オカリナを作った人の顔のわかる楽器を使うこと、④イタリアでの熱烈な歓迎振りから日本から発信したオカリナ文化が世界の人々共通する楽しみとして受け入れられたこと、などが語られた。これらの発表からわかったことは、オカリナは曲趣・奏法・曲目さえ考慮すれば、多くの国においても受け入れられるのではないか。韓国のオカリナは、楽器製作・奏法などを日本から多くを学んだが、今ではメディアを通して若者の間に広がり、又学校教育の中で取り上げられていることにより、10代・20代の若い世代にも大変な勢いで浸透しつつある。この現象は、生涯学習との関わりの中で中高年者が学んでいる日本の実態とはかなりの相違があるのではなからうか。

**Part 2. コンサート**は、それぞれの国の伝統音楽をオカリナを使って表現した。最初は、名古屋を中心に指導・演奏活動を行っている『オカリーナ・さわらび』の5名から成るグループ。演奏曲目は、日本の童謡から「しゃぼんだま」「とうりゃんせ」等、オカリナ四重奏曲。韓国からは2グループの参加があり、最初のグループ『Aves』は、8名のメンバーが色鮮やかなチマチョゴリを身に付け「トラジ打鈴」という曲にあわせてステージの後方から舞台に進んで行った。入場に際して衣装の美しさとその工夫が面白かった。『ソウル・オカリナアンサンブル』は<チャングムの誓い>より「オナラ」を8名のメンバーで演奏した。最後に大沢聡によって、世界初の3連オカリナ「イカロス」を使って「オーソレミヨ」「帰れソレントへ」などイタリアの曲が華やかに演奏された。彼の超絶技法とイカロスを使った一度に2音を発する音楽は、諸外国の人をも熱狂させるであろう。

シンポジウムが始まったのが 13:00 そしてコンサート終了が 17:00。4 時間  
にわたる企画にもかかわらず、多くの人が最後まで耳を傾け、温かく支援して  
くださったこと、そして役目を無事果たせたことに大きな喜びを覚えた。

#### ◆傍聴記

中部支部 水野みか子

今回の支部横断企画として行われたオカリナのシンポジウムとミニ・コンサ  
ートは、会場にたくさんのオカリナ・ファンが詰めかけて、学会の催しであり  
ながら、社会的にも大変有意義なものに見受けられた。オカリナの教室に通う  
比較的年輩の方々の稽古体験談や、オカリナに関する蘊蓄を披露しつつける方  
など、場内で交わされた議論は多岐にわたり、そのことがかえってオカリナの  
根付きの深さを象徴していた。客席から、あこがれの眼差しでゲスト・パネリ  
ストを見つめている女性たちの姿も印象的だった。以下ではシンポジウム傍聴  
者として感想を述べたい。

シンポジウムは名古屋市立大学教授の加藤いつみ氏の企画・司会で進められ  
た。加藤氏は、日本でのオカリナ普及の歴史と教育の関わりに関して長年研究  
を推進しておられ、楽器の普及プロセスにおいて、オカリナは、リコーダーや  
尺八と類似する点があるものの、生涯教育や社会活動の広がりに関しては特別  
な様相を呈していることを主張してこられた。オカリナは、アンサンブルする  
ことができ、特別な吹奏技術を必要とせず誰もが親しみやすい楽器である。加  
藤氏自身、生涯教育の場で指導してこられ、そうした近親感がオカリナ普及に  
大きな意味を持ったとお考えのようだ。シンポジウムでは、加藤氏の、指導者  
としての実感が楽しい語り口で語られ、教育・研究・社会活動の一環での国際  
交流の様相などが紹介された。

シンポジウムでの二番目の発言者は、韓国オカリナ協会の Park Bong Gyu 氏。  
オカリナは、日本では中高年に人気があるが、韓国では 10～30 代の年齢層の若  
者に愛好者が多い。氏の報告も、韓国オカリナ協会のホームページを参照しな  
がら、若者の活動を伝えるものとなった。シンセサイザーやコンピュータなど  
の今日的ツールとともにオカリナで音楽を楽しむ様子は、確かに日本では見ら  
れない光景である。イタリア起源のオカリナは、バロックやヨーロッパ農村地

区に伝えられる民俗的音楽にピッタリ来る音色であるばかりでなく、デジタル式に合成されたサウンドとの愛称もよいようだ。「オカリナのヨン様」と自ら名乗る終始笑顔でのプレゼンテーションは、会場をおおいに和ませるものでもあった。

そして三番目の発言者はオカリナ奏者の大沢聡氏である。氏は、国立音楽大学出身で、ピアノやヴァイオリンなどの西洋楽器ばかりでなく、琴を初めとする様々な文化圏の楽器との共演を重ね、東海地区を中心に活動している。氏のヴィルトゥオーゾぶりは、単に、「めずらしい楽器としてのオカリナでの余興」といった趣向の舞台枠をはみ出す類のものであり、ブードリオでのリサイタルも好評だったようだ。シンポジウムでの氏の発言は、サクソフォーンの勉強中に身体的問題を背負ってからオカリナに転向した逸話やピアノでの例示演奏も含んでいて、演奏家の軽妙なトークというような雰囲気を持つものであった。福祉職に就いた経験もある大沢氏は、健康・福祉の場面で音楽を考える機会もできたとのことで、福祉施設などでの演奏会にも積極的なようだ。会場には大沢ファンも多かったようだが、オカリナ演奏への興味というばかりでなく、氏の生き方に共感している、と発言する方々もおられた。

大沢氏の演奏活動の広がりや、オカリナ音楽の普及とはまた異なる意味で、すなわち、音楽実践の場に関する現代的展開といった意味からも興味深かった。西洋音楽の広いレパートリーを持つわけでもなく、二重奏や三重奏といった形態でのアンサンブルの歴史を持つわけでもないが、しかしながらオカリナは、ピッチ変化の敏捷性にすぐれ、奏者の創意と技術によって音楽シーンを拡大する可能性がある。そうした楽器で大沢氏が目下拡大している活動の場は、ライブ・ハウス、レストランやホテル、名古屋イタリア村、ブードリオのオカリナ・フェスティバルなど多彩であり、コンサート・ホールや教育現場ではない、オルタナティブ・スペースでの活躍が目立つ。音楽学分野では、作品史に偏りがちな音楽史に対して反省的議論がなされて久しいが、学問的成果発表や問題提起といった枠組みから離れて、あえて方向性の異なる発言者三人によって進められた今回のシンポジウムは、オカリナの受容、普及、教育、活動形態の変化等々、楽器と音楽にまつわる、広い視野でのクロニクルを見ることのできる楽しい企画であったことを最後に繰り返しておきたい。